

# 学び続ける心

校長 津野 庄一郎

大村はまさん「灯し続けることば」の本で出会った言葉です。

とくに、工夫した新しい授業を生徒は喜び、いつもと違っているだけで、いきってきます。「今度の学習は楽しかったです。またやりたいです」などという感想を書いたりしますが、それで教師が安心してはいけません。

本当によかったかどうかは、教師としての目で、自分でしっかり見なくてはいけないのです。教師はそれで有頂天になっていられないのです。うれしければうれいほど確実に成長しているかどうかを反省して進めなくてはならないということです。

生徒たちが楽しそうに活動していた。活発に話し合いがなされていた。しかしながら、生徒の学びは授業のねらいに迫るものであったのか。そもそもそのねらいは、教科の本質に迫るものなのか。また、生徒の力を伸ばすことになっていたのか。生徒の学びを深めたのか。授業を参観する際に、私の頭に浮かぶ問いです。授業を通して、どの生徒も確実に成長できるように働きかけを工夫すること。それが教師の大きな役目であることをあらためてかみしめています。

新学習指導要領の全面実施まであと2年余り。教室からチョークとジョークの講義一辺倒の退屈な授業は姿を消しました。今はどの教師も教材を工夫し、「主体的・対話的で深い学び」のある授業のあり方を、実践を積み上げながら模索しているところでしょう。その鍵となるのが、「良質な問い」「質の高い学習課題」です。いかに一人一人の生徒をその気にさせられるのか、夢中にさせることができるのか、学びのスイッチを上手く入れる工夫が求められるところです。したがって、そのためにもじっくりと教材を研究し、教師自身が教材の面白さや価値を見いだすよう努めなければなりません。とかく中学校は教科の壁があり、互いに授業について指摘し合うことが少ないと言われていますが、当校の教科横断的なメンバー構成による研修ユニットでの学びは、教科の枠を超えて知見を共有し、お互いの指導力をブラッシュアップさせる絶好の機会となっています。次年度も互いに切磋琢磨し、生徒たちの問題解決等に必要な資質・能力を着実に育てていきたいと思います。

授業が更新されても、その基盤となるのは、言うまでもなくどの生徒もないがしろにされない温かい支持的風土であり、望ましい人間関係です。また、どんなにいい教材や活動であっても、教師と生徒との信頼関係がなければ、授業は無味乾燥なものになるでしょう。生徒の存在を認め、リスペクトしてこそ、基盤が揺るぎないものになると考えています。謙虚に、そして、真摯に学び続けていきたいと思います。